

C03a 木曾観測所が行なうパブリックアウトリーチ

中田好一、観測所職員（木曾観測所）

木曾観測所は1974年東京天文台の観測所として創設され、全国の天文学研究者に公開される大学共同利用施設となった。現在は東京大学天文学教育センターに所属しているが共同利用施設としての運営は以前と同様に続けられている。一方、観測所の建設やその後の運営に際しては近隣の方々の支持と協力が大きな力となってきた。このような背景があって、当観測所は開所の翌年から特別公開日が設けられ、バスも通らない山中の施設に多い年には500人以上の方が訪れるようになった。公開日には夜間観望会も開かれ多くの方がシュミット望遠鏡による観測を体験している。また、地域コミュニティへの星空観望会の講師派遣も実施している。畑英利氏と観測所の共同開発による天体写真CD-ROMもパブリックアウトリーチの一種と考えてよい。

しかし、木曾観測所の教育広報活動の特徴は小中高校への特別授業であろう。福島中学校の畑英利氏の提案から始まったこの活動は、1995年以来7年間毎年6 - 14校に観測所員を派遣し、現役の研究者が天文学の先端活動を紹介するという形で続いている。最近では、列車の中で生徒から声をかけられたり、名指しで講師を依頼される研究員も出るようになった。

特別授業が主に地域社会との結びつきを狙いとしているのに対し、1998年から行なっている「銀河学校」は全国の高校生を対象に、科学研究の現場の姿を体験させることを目標にしている。参加者各人にとってこの学校が強烈な体験となったことは容易に推察され、実際「銀河学校」を契機に研究者を目指す例もある。しかし、数百万の高校生に対し二十名程度の体験学習がもつ意義の評価は難しい。「銀河学校」の一番大きな役割は、参加する気があれば「銀河学校」を体験できるという社会環境または雰囲気の一環を担うことにあるのではなからうか。